

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370284

研究課題名(和文)大量死の記憶と演劇的想像力に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study on Memory of Mass Deaths and Theatrical Imagination

研究代表者

伊藤 ゆかり (ITO, Yukari)

山梨県立大学・国際政策学部・准教授

研究者番号：80223197

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英米を中心とした大量死を描く演劇の系譜をたどることで、大量死の脅威に対する「記憶の記録装置」としての演劇の可能性を検証することを目的とした。大量死の脅威に常にさらされている現在、古くは第二次世界大戦、最近では東日本大震災による大量死の記憶と対峙すべき日本人研究者としての視点から、演劇の社会的・文化的・倫理的役割を再考することは喫緊の課題である。さらに自然災害による大量死に関する演劇の研究が少ないなか、大量死と大量虐殺双方を視野に入れ、広範囲に渡る作品を研究対象とし、研究発表および論文をとおして、大量死の脅威に抵抗する演劇独自の想像力の可能性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Our study aims to investigate the potential of theatre as the archive of memory against the threat of mass deaths through the analysis of dramas written in English depicting mass deaths. We are now living in the age of colossal loss caused by either genocide or natural disasters; furthermore we the Japanese have traumatic memories of a vast number of victims of World War II and the Great East Japan Earthquake. Therefore it is our utmost duty as Japanese scholars to reconsider the social, cultural and ethical role of theatre in representing and memorizing the colossal loss. In addition, dramas that deal with mass deaths caused by natural disasters have been less explored than those about genocide have. That has led to our unique study of a wide variety of dramas written in English as well as in Japanese. Through the presentations and papers we have revealed the potential of theatrical imagination against the threat of mass deaths.

研究分野：現代アメリカ演劇

キーワード：演劇 大量死 記憶 歴史 ト라우マ ホロコースト 東日本大震災

1. 研究開始当初の背景

(1) 演劇は、現在進行中の出来事を観客の目の前で現在進行形で描くとともに、過去の出来事を登場人物の記憶として描く。その際、登場人物にとっての現在と記憶の対比は、観客に時間や記憶についてあらためて考えることを迫る。演劇における記憶の重層性は多くの記憶についての劇を生み出し、演劇を記憶の芸術としてきた。

さらに、演劇そのものが「記憶の記録装置(アーカイヴ)」として機能する。研究分担者の常山菜穂子が述べるように、演劇は、「その文化を生みだした風土、民族、政治、経済、精神が意識的あるいは無意識的に織り込まれた、言うなれば集団的記憶装置」である。演劇は、上演されるたびに作り手によって作り変えられる芸術であり、その際一つの劇という記憶装置には新たな記憶が刻み込まれることもあれば、古い記憶が薄らぐこともある。そのようにして、上演のたびに演劇は新たな記憶装置となることで、観客に集団的な記憶を呼び起こす役割を果たす。

(2) 東日本大震災および原発事故によって、我々日本人は大量死がいつでも身近で起こりうることを実感した。さらに9・11以降世界各地において内戦、テロ行為や暴動が勃発し、誰もが大量死の脅威のなかで生きる時代となった。このような情勢において、大量死という重要課題に対し演劇が記憶装置として新たな視点を提供することが求められている。

2. 研究の目的

(1) ギリシア悲劇から始まり、シェイクスピアを経て現代に至るまで、演劇は戦争による大量死を描いてきた。それらは戦争と大量死を記憶にとどめようとする試みであり、上演されるたびに大量死に関する新たな衝撃を観客に与える。その衝撃をとおして観客は大量死を記憶し、あるいは、別の大量死を思い出す。劇が終わった後も、観客が記憶という行為を続けるならば、我々はあらたな大量虐殺を避けることができるかもしれない。ベルトルト・ブレヒトは、観客を観察者にすることにより彼らの能動性をよびさまし、人間は変わるということを前提にして、変わってゆく世界を描く叙事的演劇を提唱した。ブレヒトのこの演劇論を参照しつつ、本研究は、観客が記憶するという行為によって世界を変えようとする演劇の可能性を追求することを目的の一つとした。

(2) ホロコースト、9・11などをテーマにした演劇の研究書は出ているが、大量死という枠組みによる英米演劇の研究はほとんどなされていない。南北戦争以降9・11まで自国における大量死の脅威をほとんど感じなかったアメリカと、近代以前の戦争に比べて二度の世界大戦を経験したイギリスとい

う対照的な二国における大量死に関する経験を演劇がいかに描いてきたかを研究する意義は大きい。さらに、第二次世界大戦において被害者としても加害者としても大量虐殺を経験し、東日本大震災によって大量死と直面した日本の研究者だからこそ可能な、自然災害による大量死と大量虐殺双方を視野に入れて検証することを本研究の第二の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究対象が広範囲にわたるため、研究メンバー間の共通理解をはかることが重要と考え、研究会において、ホロコースト演劇、トラウマなどを論じる基本的文献の精読を行った。

(2) 国内外の研究者および演劇人との交流により、研究に関するより広い視点を獲得した。2015年にアメリカの劇作家ヴェリナ・ハス・ヒューストン氏を迎えた研究会を実施したことに加え、研究分担者の小菅隼人が企画・運営を行った青森市における国際パフォーマンス・スタディーズ学会の研究会議に参加した。

(3) 大量死、大量虐殺をテーマとした映画の分析を行い、異なる媒体による表現を検証することで、演劇独自の想像力について再考した。2015年から2016年にかけてホロコーストを題材としたドキュメンタリー映画『シヨア』の分析を行った。さらに、2016年には青山学院大学経済研究所と連携し、東日本大震災を描いたドキュメンタリー映画をテーマとしたシンポジウムを開催した。

(4) 研究メンバーそれぞれの専門分野において、大量死、大量虐殺に関する戯曲の分析を行い、研究発表、論文執筆などを行った。

4. 研究成果

上記「研究の方法」で挙げた4つの方法によってどのような研究成果を上げたかを説明し、最後にまとめとして今後の展望を述べることとする。

(1) ホロコーストを題材とした戯曲集の序論、第二次世界大戦以降に上演された「世界の終わり」を描く演劇に関する論文、トラウマと映画・演劇との関係を取り上げた論文、歴史における暴力の隠蔽とその忘却への挑戦に関する論文などを読んだ。それらの論文を読むことによって認識したことは、大量虐殺とその記憶を演劇とすることの難しさ、にもかかわらず困難に取り組む劇作家の想像力もつ可能性である。補助期間の初年度に研究の基礎的概念について研究メンバー間で理解を共有したことは、研究成果を上げるために重要な過程であり、各々の論文、発表などに活かされた。

(2)

アメリカの日系女性劇作家ヴェリナ・ハス・ヒューストン氏を招き、2015年6月6日に研究会を実施した。ヒューストン氏は、ギリシア悲劇を基にした劇、原爆によって深い傷をおった女性たちを描く劇など多彩な作品を発表している。研究会では、「演劇的想像力と大量死」と題した講演において、いかに大量死を描いたギリシア悲劇から自作を創造したか、また戦争をいかに女性の視点で描くかについてお話いただき、その後討論を行った。スケジュールの関係で研究メンバーのみが参加した会となったものの、女性と戦争の関係を中心に意見交換を行ない、互いにとって有益な会となった。さらなる成果として、2016年に研究分担者の堀真理子はヒューストン氏との共著論文“A Study of Adaptation”を発表した。

小菅隼人が企画・運営を行った国際パフォーマンス・スタディーズ学会(PSi)東北大会は、「けがれを超えて：パフォーマンスと東北(身体・霊性・巡礼)」というテーマのもと、2015年8月28日から9月1日まで青森市で開催された。国内外の研究者、演劇人が200名以上参加した国際会議となり、活発な議論と研究交流が行われた。講演、研究発表、ワーキング・グループ等のテーマは、土方巽、寺山修司はもちろん、パフォーマンスと場所の関係、巡礼など様々であり、研究代表者の伊藤ゆかりが司会を務めた発表は震災後の東北の祭を論じたものであった。

多様なテーマと向きあいつつ、参加者の頭の中に常にあったのは、東日本大震災および原子力発電所事故による犠牲と被害をいかに研究者および演劇人は受けとめられるか、ということである。自然災害に関する演劇研究がまだ少ないなか、このような問題意識を共有する国際会議は貴重である。詳細は小菅が「パフォーマンス研究の可能性とDMC」に書いているが、その中で同じ2015年に実施されたPSiフィリピン大会に関して示唆に富む指摘をしている。自然災害が多発するフィリピンでは、災害を単純に否定せず、環境として捉えることから議論を出発させるという。このような自然災害の受けとめ方は今後の研究に活かしうるものであり、本研究におけるPSi国際会議の成果は大きい。

(3)

クロード・ランズマン監督によるホロコーストの関係者へのインタビューからなるドキュメンタリー映画『シヨア』(1985)を研究会で取り上げ、分析した。ホロコーストの記憶がいかに人々に刻み込まれているかを検証すると共に、で述べる映画表現の特質を再考する機会となった。研究協力者の楠原偕子は、その他のホロコースト映画をも参照しつつ、長年にわたる日本演劇の批評活動を

ふまえ、古川健とハナ・モスコヴィッチという日本およびカナダの現代劇作家によるホロコースト戯曲の比較研究を現在行っており、論文を発表する予定である。

堀真理子が青山学院大学経済研究所で行っている研究プロジェクト「災害・戦争のポスト・トラウマとドキュメンタリー映画・演劇が果たす役割についての総合的研究」との共同企画として、2016年12月17日に国際シンポジウム「ドキュメンタリー映画が描く災害と大量死の記憶」を青山学院大学で開催した。映画監督ケイコ・クルディ氏(フランス)とリンダ・オオハマ氏(カナダ)を講演者として招き、大震災後の東北を撮影したそれぞれのドキュメンタリー映画の一部を上映し、自作について話していただいた。

のべ約90名が参加し、アンケートには好意的な感想が寄せられた。シンポジウムの講演者およびコメンテーターとなった研究メンバー、さらに参加者にとって自然災害による大量死と芸術作品の関係を捉える機会となった。特に両監督に制作過程をお話いただいたことが大きい。また、映像の力をあらためて実感するとともに、演劇表現の力を追及する必要を再確認した。

(4) 研究メンバーの専門分野は、伊藤が現代アメリカ演劇、堀が現代英米演劇、小菅がシェイクスピアを中心としたイギリス演劇、常山が19世紀アメリカ演劇、楠原が1960年代を中心とするアメリカ演劇と様々である。それぞれの分野において大量死・大量虐殺をテーマとして作品研究を行ったが、研究成果のなかで戦争に関する論文が多いことから、歴史上の戦争と想像上の戦争に関する論文について記述したい。

研究メンバーが論じてきたのは、シェイクスピア、サミュエル・ベケット、ヴェリナ・ハス・ヒューストン、スーザン＝ロリ・パークス、古川健などの劇作家が描く第二次世界大戦、南北戦争といった歴史上の戦争である。そのなかで堀真理子による「黙示録的時代を見据えて：第二次世界大戦後のサミュエル・ベケット」(『戦争・詩的想像力・倫理』所収)を取り上げる。

第二次世界大戦がもたらした犠牲の悲惨さを実体験として感じたベケットは、死者の思いが言葉で説明できない、不可能への挑戦であることを確認しつつも、記憶から忘却された死者たちの声をよみがえらせようと試みた。堀は、ベケットがみつめていた黙示録的世界を記述しつつ、主要作品の分析をとおして、ベケットが、「一貫して死者と向きあい、人間的であることとは何かを問いつづけた」と述べる。ギリシア悲劇とベケット作品との類似性、トラウマ、歴史的暴力の隠蔽などの視点もくわえ、本研究の集大成とも言えるべき論文である。

一方、伊藤ゆかりの論文「アメリカ演劇が描く戦争の脅威」が取り上げたホセ・リヴェラの『マリソル』は、天使と神の戦いに人間が巻き込まれるという大衆小説か SF 映画のような内容である。堀が批判する「非現実を目を向ける」SF とも言えるかもしれない。しかし、リヴェラの執筆の主眼は 1990 年前後のニューヨーク、特にホームレスの窮状にある。現実の社会状況への批判と変革への希望をこめて、大衆小説的な黙示録的世界の枠組みを用いたのだ。伊藤は、リヴェラが単なる荒唐無稽な劇としないために、生々しい身体感覚とともに最終戦争に至る過程を描いていることと、その限界を分析し、『マリソル』が想像上の大量死と現実の社会批判を結びつける一つの試みであることを明らかにした。

(5) 本研究において、演劇、パフォーマンスなど多角的視点から、大量死という言葉化と記憶を拒否する出来事をいかに個々の演劇作品が描いてきたかを明らかにした。今後は、歴史において現われる暴力の被害者たちの亡霊をキーワードに、歴史と社会、記憶と演劇の複雑な関係を、演劇作品の検証をとおしてさらに追求したい。また、世界情勢を反映してテロリズムや戦争を描く戯曲は相当数あり、今後の研究のために有益な解題書目の作成などのデータ整理も課題の一つである。

<引用文献>

近藤光雄、常山菜穂子他、慶應義塾大学出版会、記憶を紡ぐアメリカ：分断の危機を超えて、2005、354 (193 - 230)

ベルトルト・ブレヒト、河出書房新社、ブレヒトの文学・芸術論 (新版) 2006、448

小菅隼人、パフォーマンス研究の可能性と DMC : PSi#21 Fluid States 2015 Tohoku の概要とその意義、慶應義塾大学 DMC 紀要、第 3 巻第 1 号、2016、33 - 57

伊達直之、堀真理子、佐藤亨、外岡尚美、水声社、戦争・詩的想像力・倫理 アイルランド内戦、核戦争、北アイルランド紛争、イラク戦争、2016、295 (95 - 153)

伊藤ゆかり、アメリカ演劇が描く戦争の脅威 『マリソル』における戦いをめぐる空間と身体性、山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要、第 11 号、2016、12 - 21

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

伊藤ゆかり、スーザン＝ロリ・パークスにおける歴史と記憶、山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要、査読有、第 12 号、2017、pp. 23 - 33
http://libweb.nlib.yamanashi-ken.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002repository_kgk2017003

小菅隼人、シェイクスピア劇の人物造形について 『ジュリアス・シーザー』におけるシーザーとブルータス、慶應義塾大学アート・センター/Booklet 25 : シェイクスピア 拡張する世界、査読無、25 号、2017、pp. 80 - 98

伊藤ゆかり、アメリカ演劇が描く戦争の脅威 『マリソル』における戦いをめぐる空間と身体性、山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要、査読有、第 11 号、2016、pp. 12 - 21
http://libweb.nlib.yamanashi-ken.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002repository_kgk2016002

小菅隼人、パフォーマンス研究の可能性と DMC : PSi#21 Fluid States 2015 Tohoku の概要とその意義、慶應義塾大学 DMC 紀要、査読無、第 3 巻第 1 号、2016、pp. 33 - 57
http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=K032002001-00000003-0033

堀真理子、“Let Us Not Forget the War” : Moira Buffini’s WELCOME TO THEBES and Velina Hasu Houston’s THE INTUITION OF IPHIGENIA、青山スタンダード論集、査読無、第 10 号、2015、pp. 243 - 263

〔学会発表〕(計 5 件)

堀真理子、Forgetfulness of the Past as Revealed in WAITING FOR GODOT and GODOT HAS COME、International Federation of Theatre Research’s annual conference、2016 年 6 月 14 日、ストックホルム (スウェーデン)

小菅隼人、Performances and the National Trauma: How Are Artists To Respond to Large-scale Disaster and Its Aftermath?、PSi#21 Philippines: On Tilted Earth、2015 年 11 月 6 日、マニラ (フィリピン)

〔図書〕(計 3 件)

江藤秀一、堀真理子、対馬美千子他、春風社、帝国と文化 シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで、2016、510 (169 - 186)

伊達直之、堀真理子、佐藤亨、外岡尚美、水声社、戦争・詩的想像力・倫理 アイルランド内戦、核戦争、北アイルランド紛争、イラク戦争、2016、295 (95 - 153)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 ゆかり (ITO, Yukari)
山梨県立大学・国際政策学部・准教授
研究者番号：80223197

(2) 研究分担者

堀 真理子 (HORI, Mariko)
青山学院大学・経済学部・教授
研究者番号：50190228

小菅 隼人 (KOSUGE, Hayato)
慶應義塾大学・理工学部・教授
研究者番号：40248993

常山 菜穂子 (TSUNEYAMA, Nahoko)
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：00327686

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

楠原 偕子 (KUSUHARA, Tomoko)